

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.55

平成30年3月31日

連盟創立70周年



会長 馬場 洋一

に要したエネルギーは、大変なものだったに違いありません。創立50周年記念誌「お能と横浜」に、その詳しい経緯が述べられています。

昭和23（1948）年7月11日に創立された横浜能楽連盟は、今年70周年を迎えます。当時の世相を見ると、「帝銀事件」が起き、「NHKのど自慢」が始まり、10歳の美空ひばりがデビューし、太宰治が亡くなっています。終戦からわずか3年という時期でもあり、昭和20（1945）年5月29日の横浜大空襲で中心部が焼け野原となった横浜は、復興途上だったと思います。

そんな状況の中で「横浜能楽連盟」は産声を上げたのです。能楽愛好者が創立し、五流一派が参加する全国でも稀な組織と言われますが、その創立と存続

また、素人の精進お披露目の場である「横浜五流能楽大会」は今年で33回、「五流交流のつどい」は21回を数えます。こうして振り返ると、改めて大先輩たちの「能楽継承」の熱意に感銘を受けると同時に、現在の運営を託された者として身を引き締まる思いがします。元会長の新堀豊彦さんは、26

年間会長を務め、様々な事業を行われました。例えば、前述の素人能楽大会を起ち上げ、「能楽の親しみやすさ」発信の場としました。また、横浜能楽堂の建設にも中心となって関わり、行政への働きかけや市民の寄付集めなど、建設実現に尽力されました。「能楽が趣味の人ももっと増やしたい」が新堀さんの口癖で、常に能楽の継承と

そのために必要な能楽愛好者を増やすことを目指して行動されました。これは現在の連盟役員に共通する思いでもあります。そこで、この70周年を飾る記念事業として「横浜能楽連盟ホームページ（HP）」を起ち上げることを決めました。創立から70年が経った今、先達の思いを時代に合わせた方法で実現するのが私共の役目だと考えたからです。3年前に「会員増強プロジェクト」の提言を受けて以来、連盟の存在のアピールと動員増を検討してきました。第1弾として、能楽大会のチラシを作成し、会員に配布するとともに公共施設にも配架依頼をしまし

た。その後動員や問い合わせが増え、確かな手応えを感じています。第2弾がHPの起ち上げです。デジタル時代の現在、スマホやパソコンは日常的に浸透しています。HPに様々な情報を掲載し、能楽に興味を持って

もらえるような「お能への入り口」の機能を果たそうという趣旨です。

もちろん、HPは、会員への情報伝達手段としても活用します。会員のシルバリー化を挙げて疑問を示す方もおられるでしょうが、大丈夫です。シルバリー世代は元気です。先日のニュースで、80歳で高齢者向けのアプリを開発した藤沢市の女性が、82歳の今年、高齢者とデジタル技術をテーマにした国連での会議で基調講演したと知りまし

第33回五流能楽大会「報告

金剛流 倉藤 睦子

平成29年10月7日（土）、横浜能楽堂において、横浜能楽連盟主催「五流能楽大会」が、横浜市文化観光局共催・横浜能楽堂後援を得て開催されました。

番組総数は42番（素謡13・連吟7・仕舞17・独鼓1・独吟4）、延べ出演者は約300名でした。恒例の五流競演（同一曲同一箇所）は季節柄「三井寺道行」といたしました。「三井寺道行」は流派によって、舞のあるなしなど扱い方が様々で、面白いものとなりました。

今回担当するに当たっては、多くの方々に協力いただきました。番組編成・校正には複数の手がなくてはできなかったことを実感いたしました。暑い日に何度も一緒に作業して下さった方々にお礼申し上げます。会当日の運営は、流友の方々がてきぱきと進行にあたり、ほぼ時間通り終了いたしました。切戸口での出演者の流れを整理したことも、大変効果的だったと思います。

今回も、チラシを横浜市内の公民館・地区センター等に配架依頼しました。その効果か、少しずつ来場者が増えてきたように見えるのは嬉しい限りです。ただ残念なことに、最後のほうになると見所はとて寂しくなってしまう。せつかくの舞台、少しでも多くの方に見ていただけたらと思います。全国



でも珍しくシテ方全流派とワキ方一流派が揃って出演。なんて贅沢な会なのでしょう！せめてご自分の出番の前後何番かだけでも見ていただければ、見所はもっと賑やかになることでしょう。一般の方々の来場ももっとあれば嬉しいですが、会員たちがお互いの舞台を見合うということも大切にしていきたいと感じました。

海謡会の歴史

観世流 小田切 威

私も海謡会は、昭和30年4月17日に会長・宮越賢治氏宅舞台（横浜市中区西竹の丸に昭和28年5月23日竣工披露）において第1回例会を開催して以来、平成29年11月18日で第125回を数えました。

創立者は、宮越賢治氏と海の仕事に関係する方々で、会長の宮越氏は、横浜港の有名な水先案内人をされていた方です。創立当時の海謡会構成メンバーは海事関係の役所（横浜検疫所・海運局・海難審判庁・横浜市港湾局・東京湾水先案内人組合・日本郵船・菱光倉庫・ポートサービス・日本鋼管・藤本企業・新和海運・商船三井など）の方々でした。第1回例会から第22回例会までは前述の竹の丸の舞台で、その後は、昭和41年4月17日に建設された「宮越記念

久良岐能舞台」で第64回まで開催されました。

昭和61年12月1日に宮越氏が逝去されたため、会長は喜多流の浦部毅氏となり、副会長に岡幸男・広井徳平・松本正子、常任幹事に中島秀次郎、常任監事に緒方睦生、幹事に井實昭子・斉藤弘・大館憐雄・宮地光之・馬場洋一・山中文人、監事に芹沢宏佳等の方々の体制で、参加者100人を超える盛大な例会が行われてきました。

その後、平成11年8月には浦部会長が健康上の理由で退任され、会長は岡幸男氏に引き継がれましたが、岡氏も平成13年に業務の都合により辞任されました。続いて本戸幸男会長が就任して平成15年4月の第96回例会から担当され、平成17年4月には第100回例会を開催して成果を上げました。しかし、本戸会長も平成23年8月に逝去されたため、その後は横山哲夫氏が会長となり、海謡会の第120回例会を横浜能楽堂で開催いたしました。

今後は、横浜能楽連盟の皆様と喜多流のお力もお借りして、数年後の第130回例会を成功させたいと思います。現在は会員構成人数の減少に苦しんでいますが、連盟会員の皆様のお力もいただきながら、謡曲を楽しんでもらえる企画を立案したい

と考えております。会員数やその質は変化していても、横浜で一番歴史のある謡曲の集まりであります。皆様のご指導の下で、より多くの歴史を積み重ねていきたいと思っております。

能と先生と私

観世流梅若会 小倉 まさ子

私が元町の堀内先生のお宅へお稽古に通うようになってから早7年がたとうとしています。当時の勤め先でお世話になった方にお誘いいただいたのがきっかけです。それまで全く縁のなかった能は、歌舞伎と同じように男性が演じるものだと思っていました。先生も女性の方だし、女の人もたくさん習っているのよ」と教えていただき、へえ、そういうものか何の予備知識もなく、えいやあと飛び込んでしまいました。

まだお稽古を始めて間もない頃、こんな事がありました。「土蜘蛛」を習っていた時、おどろおどろしくも勇ましい謡を聞いているうちに、どうして土蜘蛛は頼光の元へ現れて退治されることになったのか疑問に思いました。先生に「土蜘蛛と頼光は何か因縁があったのですか？」とお尋ねしたことがあります。先生から返ってきた答えは、「理由はありませんよ。そういうものです」とのことでした。

能の世界は奥が深いと思った次第です。

私のお稽古のペースは、月1回。亀の歩みのような成長なので、先生はさぞかしやきもきされていらつしやると思います。そんな私がここまで長く続けてこられたのは、もちろん先生の温かいご指導のお蔭ですが、実はお稽古以外にも楽しみがあったからです。お稽古で通う先生のご自宅のお庭はとても情緒豊かで、春にはスイセン、夏から秋にかけてはハンゲショウ・ハナミョウガ・ホトトギスなどがお庭のあちこちから顔をのぞかせてくれます。都会育ちの若い世代の方にはピンとこないかもしれませんが、田畑や山に囲まれた田舎で生まれて育った私にとっては、身近に慣れ親しんだ野草たちです。季節を感じながら先生とおしゃべりの時間が、私にとっては貴重な心安らぐひとときになっています。

このように、お稽古よりもおしゃべりを目当てに通っている私ですが、昨年の10月、横浜能楽堂の舞台上に上がらせていただく機会がありました。「海人」「蘆刈」「三井寺」の地謡を演らせていただきましたが、緊張で口から心臓が飛び出すかと思いました。とても立派な舞台で良い記念になりましたが、舞台はこれで最初で最後にして、これ

からも先生とおしゃべりを愉しく楽しみたいと思います。

仕舞と謡の稽古

喜多流 久米 五郎太

みなとみらいで働くようになった冬に、「初めての教室」で「月宮殿」を習った。その後、会社帰りに通える横浜能楽堂で稽古をする出雲先生のクラスに加えていただいた。爾来月に2回、紅葉坂を登って、仕舞と謡の稽古をして、舞台での年2回の発表会にも参加している。足かけ13年、いつか七十も半ばに近づく。この間、職場が東京に代わり、家内が亡くなる等、身の周りに変化もあった。

稽古の仲間はかなり前に4人になり、最近男性3人である。月2回ということは、かれこれ300回以上稽古をしたことになる。たまに休むが、細々ながら続けているのは何故だろうか？やはり一流の能楽師の先生に直接習うということの醍醐味や有難さもある。

仕舞は練習不足が露呈するが、足拍子を打ち、舞い修めるとホッとします。謡は先生の後につき、或いは声を合わせ、大きな声を張り上げるので、実に爽快である。先生と一緒に謡っていると、自分が上手になったような気がする。最近アイフォ

だき、電車の中でイヤホンをつける。仕舞も謡も当初思ったよりずっと難しい。資質の無さも重なる。いつまでも上達せず、いつか毎日練習さえすれば、と思っている生徒を許してくれる先生に感謝だ。稽古熱心な仲間にも刺激を受ける。

出雲会の発表会。紋付と袴は一人でなんとか着けられても、キリッと着るのは難しい。12月の会では、仕舞は「老松」。「杜若」の連吟では、先生からドンと行くように言われ、シテの声を張り上げたが、上音が少し高かっただろうか。また、毎年4月に厳島で奉納があり、数年前に「菊慈童」の地謡で初めて参加した。波の音が遠く聞こえ、少し離れた見所では人の動きがある。先生達に混ざって大きな声を出した。

目黒や国立能楽堂で舞台を見、時たま京都で能の名所を歩く。仕舞でインナーマッスルが鍛えられ、お茶で能を意識する。もうしばらくは、稽古を通じ、能楽の世界を楽しもう。

古庭の花園

宝生流 大川 洋子

もう数十年前も前の学生時代、梅雨も明けようとする夏休みの1週間ほど前に、体育館で文化教室が開催されました。事前に何も予備知識のないまま、突然

6メートル四方に笹竹が立てられ、能舞台の空間が出現したのです。初めは、何なのか理解することは到底できませんでしたが、目の前に広がったのは白を基調とした装束であつたと記憶しています。そのうちにどこかで聞き覚えのあるようなリズムが。神楽？定かではないのですが、そのうちに耳も慣れてきたのか、音や言葉が頭の中に入ってきました。これは何だ？源平合戦の内容だ。少しづつ話が解かれていき、汗をものともしない熱演に感心して見ていました。終演後の演者の解説では、このグループで県内の学校を巡回しているとのこと。このような職業もあるのか、全く知らない遠い世界だなあと、友人と話していました。今にして思えば鎌倉の中森晶三さん（観世流）の社中だったようで、後年鎌倉舞台での話の中で、学校を巡回していた時代があつたと話されていたので、数十年前ぶりにここで繋がったのでした。

その後、このようなビュアな経験が持続することもなく、能は私の日々の暮らしの中からは遠い存在になっていきましたが、ある時、私の目の前であの6メートル四方の空間に花園が展開されたのです。それは千駄ヶ谷の能楽堂で偶然に「胡蝶」を拝見したときのこと、今でも忘

れられません。「胡蝶」では、梅花・梅香とありますが、私の脳内には勝手に菜の花のような黄色が浮かび「立つるや花の下臥に衣片敷く」の情景は黄金色に満ちていました。これはスゴイものだ、こんな作品をもっと見てみたいと思いました。ちなみに、この日の終演後にワキ方の森茂好さんが突然亡くなられ、これが最後の舞台となったのは残念なことでした。

謡をお稽古し始めてからは舞台を観ることも多くなりましたが、「何だこれは。面白そうじゃないか！」といった気分は何度でも巡り合えるよう、こちらの側も、気々を柔軟に研ぎ澄まして、チャレンジしていきたいと思っています。

明治22年憲法発布記念

横浜での金剛流演能

金剛流 齊藤 隆

「横浜能楽連盟創立五十周年記念誌 お能と横浜」（平成10年発行）の各流派紹介『金剛流』には、「横浜における金剛流の足跡は、昭和の大戦以前の能謡に関する諸記録の中から知ることができなかった」とあります。ところが、私が平成22年

に入手した「能楽藝話 金剛右京談 三宅襄（のぼる）聞書」（三宅保子編・檜書店発行・昭和46年刊行）の「野外能の思い出」（P10）に拠ると、横浜における金剛流の足跡は明治22年（129年前）まで遡ることができ、演目・演者の記録のあるものとしては、一番古いかもしれません。

『（一部略）』：明治22年2月11日、紀元節に憲法発布の祝賀の能をやって貰いたいと横浜の有志に頼まりました。場所は最初には公会堂の予定でしたが、一般にも公開した方が宜しかろうと前日急に（野毛）公園で催すことになりました。その時の番組は「弓八幡」（右京）、「望月」（寺田佐門治）、狂言「末広」（高安甚左衛門）でした。私（右京）はこのシテで初めて面をかけました。17才です。当日は雪おろしの風が吹いて寒い日でした。かの人達（外国人）はめいめいに椅子を持参しましたが、それが驚いたことに（仮）舞台へ上がるつもりで、人を払い除けながら舞台上に近づいてくるので、見物人は怒る、楽屋総出で断るやらなだめるやらして、やつとのことで整理し、幸い雪も降らず寒いながら済みました。はじめは一日で止めるつもりでしたが、評判がよかったのでもう一日演りました。面装束の用意がないので、同行した装束師の関岡に直ぐ東京に帰って貰い、翌日の装束等の支度を

させました。夜に戻ってきた関岡が、森（有礼）文部卿が西野文太郎という男に刺され、ヒックリ返るような騒ぎだからこのまま帰りましょうというのです。皆で相談して二日目もやることにし、「橋弁慶（金剛氏重）」「猩々（右京）、狂言「どもり」（甚左衛門）」を出しました。大叔父の氏重がかようなめでたい時だからトメを返せと申しましてね、「めでたけれ」を二度謡いました。また二日目は中途から雪になり、見物の方々は御迷惑でした。（中略）：この野毛では、私共の後で狂言の三宅惣三郎が主催で、やはり野外能をやりました。こういう次第で、横浜の能の草分けは金剛流です。」

当時の観客の熱気や、外国人が幅を利かせていたことが感じられます。明治14年に能楽社により芝（港区）に舞台が作られ、各流能役者に演能の場が確保されるようになって8年目、能楽界が復興に向かっていった頃です。

能楽への期待？

金春流 高橋 重雄

仕舞と謡の稽古を始めて、20年目となる。海外での生活を10年間ほど経験したこともあり、何か日本文化に関わることを行いたいと思っていたところに、

縁あって金春流シテ方能楽師山井綱雄先生の教室に入る機会を得た。始めた頃は能楽に関する知識はなく、やる事はすべて初めてだったため、稽古を楽しむ余裕はなかった。しかし、止めずに続けているうちに少しずつ余裕も生まれ、今は舞台に立つことを楽しめるようになった。

稽古を始めて以来いろいろと学ぶことも多かったが、この頃は能楽の奥深さを感じている。初めの頃は、仕舞の型と謡を覚えるだけで精一杯であった。それがある程度できるようになると、舞の緩急のつけ方、謡の間の取り方などに関する指摘を受けることも増えた。体に力を入れないように言われる時もある

が、これがまた難しい。稽古には終わりが無いということがわかってきた。

舞囃子も、中之舞から始めて楽や鞆鼓等も含め一通りやったが、囃子のことが基本的にわかっていないので、今でもやる度に冷や汗ものである。囃子の勉強も奥が深そうで、始めたほうが望ましいものの、いまだに手を出せないでいる。同様に、能の演目の題材となった文学作品に親しむことも有益だと思うのだが、高校時代に古文の授業が苦手だった身には、これも心理的な敷居が高い。

時期になった。定年を迎えると毎日やる事がなくて困るという話も聞くが、私の場合はそうした悩みを抱えることは無さそうだった。実際に出来るかどうかは別として、古典文学に断片的にでも親しみ、囃子の基本について学ぶだけでも時間が足りないだろう。また旅行が趣味なので、近年は旅行の際に能とゆかりのある地を訪れることも始めた。昨年は大阪のあべのハルカスに行った際に、近くの松虫塚を訪れた。今後も機会を見つけて訪問地を増やしていきたい。私の一方的な思いであるが、能楽にかかわることで、退職後の生活も退屈せず充実したものになることを期待している。

能楽堂だより

30年4月・30年8月の公演案内

30年4月以降の横浜能楽堂の公演予定は次の通りです。このほか、毎月第二日曜日に普及公演「横浜狂言堂」を開催いたします。

第66回横浜能

6月2日(土) 午後2時開演
狂言「佐渡狐」(和泉流) 野村万蔵
能「砧」(金春流) 櫻間金記

S席四千元/A席三千五百円/B席三千元
チケット発売中

特別企画公演

「花開く伝統 日台の名作と新作」

6月9日(土) 午後2時開演、
17日(日) 午後4時開演

崑劇「牡丹亭」(9日)、崑劇「繡襦記」(17日)

日本舞踊「藤娘」 水木佑歌(9日)、

「汐汲」 藤間恵都子(17日)

日台共同制作作品(新作)「繡襦夢」

常磐津文字兵衛、台湾・国光劇団ほか

S席六千元/A席五千元/B席四千元

チケット発売中

講座「人間国宝・山本東次郎先生の狂言の時間」

8月11日(土) 午後2時開演

狂言「呼声」(大蔵流) 山本則俊

狂言「髭櫓」(大蔵流) 山本東次郎

解説・山本東次郎

全席指定・こども五百円/おとな二千元

チケット発売日: 5月12日(土) 正午から

(初日は電話・WEBのみ)

謡曲との出会い

下掛宝生流 先崎 仁美

6年前、町内の敬老新年会に自治会役員として招待され、和やかに会食していると、来賓として招待されていた藤田先生の「謡曲」が始まりました。張りのある心に響く力強い声は、私にとっては未知の経験、いや正に「未知との遭遇」でした。それまで歓談していた方々も先生の謡に聞き惚れ、シーンと静まり返ったほどです。その時から私は「謡曲」の虜になってしまいました。早速、藤田先生に「私でも謡えるようになりますか?」と話しかけますと「貴方よりずっとお年寄りの方でも元気に謡っています。大丈夫です。一緒にやりましょう」と誘っていただきました。

謡曲教室は平日でしたが、当時に会社勤めをしていた私の都合に合わせ、先生は休日に個人稽古の時間を割いて指導を開始してくれました。初めて手渡された謡本は「鶴亀」でした。団塊の世代に生まれ育った私は、何事も同世代の人達と競い合って前進する人生で、日本の伝統芸能を味わう余裕、触れ合う機会を作り出せないまま、ここまで来てしまいました。この年齢になって初めて歴史と伝統のある謡本を手にして、やっと日本古

典芸術に触れることができるという喜びと興奮を覚えました。

先生の指導は時に厳しく、時には「声が良く出ていてお謡の声になってきています。上手に謡えていますよ」と、私達のやる気を引き出してくれました。また先生は「一つ一つの音を大切に。区切りの音が弱々しいと曲全体がだらけてしまう。お腹に力を入れて力強く音を切る」と指導されます。今では私の本棚には謡本が20冊近くも揃い、その隣には先生が私達の練習のために録音してくれたCDも数多く並んでいます。今年の「第21回五流のつどい」では「敦盛」のシテ役をいただきました。とても光栄に感じて、新たなやる気が沸き上がりました。

謡曲を始めてから、物語の背景、登場する人物、言葉の美しい響きなどをもっと深く理解したいと思う、今までと全く違った自分があるのを感じます。古希を迎えた今、謡曲と私を結び付けてくれた先生に感謝しながら、これからも謡曲と共に成長していく自分を見つめていきたいと思っています。

横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤

TEL〇四五―八三五―二三六一

◎横浜能楽堂

TEL〇四五―二六三―三〇五五

◎連盟後援行事

「第37回面友会能面展」3月22日(木)・27日(火)・馬車道アートギャラリー／「横浜宝生流連合会第31回謡曲大会」8月25日(土) 横浜能楽堂本舞台

※入場無料